

KG神奈川第25回ミニ講演会 報告

関西学院同窓会神奈川支部事務局

日 時:2026年3月15日(日)午前11時～12時30分 (終了後、懇親会)

場 所:関内・澤田聖徳ビル5階B会議室

参加者:講演会24名(1964～1987年卒)、懇親会22名

講 師:中島一郎氏(1979年経済学部卒)

テーマ:「ボーイスカウトの世界」

《はじめに》

今回は 25 年以上の長きに亘りボーイスカウトの指導役に携わってこられている中島一郎氏から、ボーイスカウトに関わるようになった経緯を始め、その活動内容や子供達を指導する中で、ご自身が感じられた思いや学びなど大変興味深い貴重なお話をいただきました。当日はボーイスカウトの会場場所からユニフォーム姿で直接お越し頂き、臨場感あふれる講演会となりました。

当日の受付は高沢光代副支部長(1983 文)と中村文郎幹事(1987 商)が、司会は中島さんとスキーツアーにご一緒されている横田敦子副支部長(1983 社)が担当しました。会の始めに、井村支部長から直近に小田原で開催されたサテライト同窓会の模様やこの 7 月に今年のクルージングパーティに引き続き新企画を予定しているなどの支部活動の状況や同窓会本部の新しい取り組み(KG アプリなど)の紹介を含めた開会挨拶がありました。



《講師紹介》

講師、中島一郎氏は大阪市生まれで中高大と関学一色で育つ。高校・大学では金剛禅少林寺拳法西宮西道院に通い、少拳士二段を取得。卒業後は関西に本社を構える損害保険会社に就職し関西での勤務を目論んだが、意に反し首都圏ばかりの勤務だったとも。

《講演内容》

1. ボーイスカウト運動について

・歴史

ボーイスカウトの発祥は、1907 年、元陸軍軍人のベーデン・パウエル卿が、道端に座り込み、たばこや酒に溺れる若者の姿を憂



慮し、20人の少年を集めてイギリスのブラウンシー島で開催した実験キャンプでした。

・日本のボーイスカウトの歴史

日本には翌年の1908年にこの運動が伝わり、各地で少年団が結成されました。1912年にはパウエル卿が来日して横浜にあるグリフィン隊を訪問、1922年に少年団日本連盟が結成され、ボーイスカウト国際連盟に正式加入、1983年には登録数33万人(ピーク時)を記録しました。

・組織

スカウトの団組織は、年齢順に、ビーバー隊(年長組～小2)、カブ隊(小3～小5)、ボーイ隊(小6～中3)、ベンチャー隊(高1～高3)、ローバー隊(18歳～25歳)となっています。

中島さんが団委員長を務めるボーイスカウト横浜第8団の設立は1949年にさかのぼり、1959年に「団」として登録されました。主な活動地域は東急線妙蓮寺駅周辺からJR新横浜駅周辺で、現在76名のスカウトが在籍しており、県下では2番目の規模です。

2. 日本での発展経緯

初代総長は後藤新平氏(元東京市長)。彼の教えが「自治三訣」というもので、ボーイスカウト精神の根本です。

- ・人のお世話にならぬよう
- ・人のお世話が出来るよう
- ・そして報いを求めぬよう

まずは自分自身のことを出来ることから始めて、他人のお世話をしましょう、というものです。日本での歴史において忘れてはならないのが、佐野常羽氏。ボーイスカウトの指導者訓練の基礎を築いたとされ、「清規三事」と呼ばれる「実践躬行」「精究教理」「道心堅固」という三つの教義を唱えました。

歴代の連盟理事長には名だたる実業界のトップが就くことが多くあり、スカウトを経験していることが評価され、そうした企業に就職した例もありました。

日本のボーイスカウトは、ピーク時には登録数は33万人に上りましたが、昨年度の登録数は7.7万人にとどまっています。

3. ボーイスカウト活動との出会い

長男が1999年にカブ隊に入隊したので、そのお手伝いのつもりで指導者に就きました。長男のボーイ隊上進でお役御免かと思われましたが、長女がビーバー隊に入隊することになり、辞めるわけにいかず指導者を継続しているうちに、長女がカブ隊・ボーイ隊に上進、次男がビーバー隊に入隊したので、またまた辞めることができずに指導者を継続、隊長に昇進し、足抜けできないまま今でも指導者を継続することになりました。

4. ボーイスカウト活動の特徴

・ボーイスカウトの敬礼方法には特徴があり、人差し指、中指、薬指の3本指で敬礼します。この三つには次の意味があります。

1. 神(仏)と国とに誠を尽くしておきてを守ります

1. いつも、他の人々をたすけます

1. からだを強くし、心をすこやかに、徳を養います

・モットーは「そなえよ常に」、スローガンは「日々の善行」です。

・ボーイスカウトの教育方法はノンフォーマル教育です。基本は、教えない、強制しない、支援する、見守る、機会を提供する、です。

・カブスカウトの「カブ」はジャングルブックに登場するオオカミの子供のことで、カブスカウト達は人差し指と中指の2本で敬礼します。その意味はその形がオオカミの耳の形だからです。



5. ボーイスカウト活動を続ける理由

・自分自身の発見の場

ボーイスカウト活動は子供たちにとって役立つだけでなく、大人も失敗を経験したり、新たな発見を見出したりすることがあります。たとえばテントの張り方、ダッチオーブンの使い方、山登りの仕方などなど。また定年退職し、日々の時間にゆとりができた時に何をしたら良いのか迷っていた時に、ボーイスカウト活動に参画できたことでいろいろなことに挑戦できました。そうした活動の延長で、地域の災害ボランティア活動にも参画することができ、自治会とのつながりもできました。

・個人的な事情

50歳前、カブ隊長に就いた直後に顔面が麻痺する病気を経験しました。ボーイスカウト活動を休むことができないので活動に参加すると、子供たちが顔面の異状を心配してくれ、中には頬を触ってくる子もいました。病状が改善してくると素直に喜んでくれます。そうした雰囲気はずいぶんと癒されました。主治医によると、外出が嫌になり、他人との会話を避けてしまうと顔の筋肉が固まったままだったかも知れない、話したり笑ったりすることが大切、ということでした。

・家族と歩んできた道

我が家には“スカウトモード”という魔法の時間帯があります。妻もスカウトのリーダーを務めているので、家族全員がスカウトのユニフォームを着ている間はスカウトの話が共通の話題となります。思春期の子供たちも、この時だけは活動やリーダーの評価も含めて会話がはずみます。

・スカウトの感想

自団のローバースカウトが、社会に出て会議などでホワイトボードを借りてきてと言われて、マーカーやマーカー消しも一緒に借りて来れるのはスカウト経験のある人だと、が話してくれました。また、子供の頃は両親以外の年長者と話すことはあまりないはずだが、スカウトの経験で世代を超えた人たちと密な交流ができたことが素晴らしかったとも聞きました。

6. 現在のボーイスカウト活動の紹介など

東日本大震災支援として、三陸町綾里で津波にのまれて散乱したわかめの養殖筏に附属する浮き球を利用した募金活動を行いました。また、能登地震支援として、過去にジャンボリーを開催した珠洲市の被災家屋の土砂撤去活動をローバースカウトが行いました。こうした活動が港北区の災害ボランティア活動にもつながりました。

7. おわりに

振り返って忙しい仕事の傍ら、25年もの長い間、ボーイスカウト活動にどっぷりとはまってしまった自分を見つめ直すと、仕事場以外の場所であったこと、家族とともに同じ経験を積むことができたこと、病気となった自分自身が助けられたことなどが背景にありました。

自分自身の変化という意味では、子供の多様性に直面して視野が広くなり、自分の子供に優しくなりました。また、どこでスカウトに観られているかわからないので交通規則などルールを守るようになりました。

今でも毎月10回程度の会合があり、自分自身の時間を持つことができない、企業の定年延長制度の余波を受けて次の指導者を確保できない、今時の親世代との考え方の違いなどの悩みはありますが、団委員長を辞めるつもりはありませんので、これからも続けて参ります。

ご清聴をありがとうございました。



以上(文責:事務局長 松本邦康)